

Title	福澤先生資料拾遺
Sub Title	
Author	富田, 正文(Tomita, Masafumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.3 (1934. 11) ,p.165(511)- 198(544)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19341100-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤先生資料拾遺

富田正文

まへがき

石河幹明氏が編纂せられた正續福澤全集十七卷は、世に公けにされた先生の著譯書、論說、其他は一切これを網羅し、又公けにせられたことのない遺文、草稿、書翰類をも手の及ぶ限り蒐集して、

總項目約四千、菊版一萬二千五百頁を越ゆる尠然たる大集成で、古今東西を通ずる屈指の大全集であるが、尙ほ世上にはこれに洩れてゐる資料が少なくないことであらう。現に私がその所在を聞いて未だこれを見る機會を得ずにあるものも二三あり、既に續全集刊行後に於て筆寫し得た資料も十

數點に上つてゐる。これらは適當の機會に於て印刷に附して置きたいと思つてゐたところ、幸ひ今度「史學」が福澤先生誕生百年記念號を發刊するに付、其遺文のために誌面を提供せらるることになつたのは、實に喜びに堪へない。

今回發表するものは、清岡邦之助氏の好意により最近本塾圖書館の所藏に歸した先生の遺稿であつて、總計十五點の中、十一點までは未發表の原稿で、一點は書翰、其他は既に活字になつたことのある原稿である。これは先生の晩年、其家に於て原稿の整理等をしたことのある塾員某氏の家に保存されてあつたもので、某氏は既に故人である

が、最近その遺族に於てこれを他に譲りたいとの希望があつたので、清岡氏はこれを聞き、かゝる珍重すべき先生の遺文が世上に散佚せんことを惜み、値を問はずしてこれを取纏めて買取り、塾の圖書館へ寄贈せられたのである。吾々は讀者諸氏と共に此貴重な資料を容易に手に取つて見ることが出来るやうになつたのを喜ぶと同時に、清岡氏の篤志に對し深く感謝する次第である。最初私はこれにや、詳しい解説を附して掲載する積りであつたが、時日を遷延してゐる中に餘裕がなくなり、已むを得ず今回は原文の儘、簡単な註を施して左に列記することにした。

其 一

註 明治四年の執筆。千里軒といふ西洋料理店より頼まれて認められた開業廣告の案内文案であらう。千里軒は數寄屋町河岸にあつた。明治三年に執筆された「肉食之說」(「續福澤全集」第七卷三八五頁)は、これによく似た文意で参考となる。

(以下單に参考となるべき文章の表題と正續兩全集所掲の卷次及び頁數のみを記す)

人の飲食するものは悉く化して骨肉となるにあらず一と先づ腹中に納り其精分を瀝こし分け骨となるべきは骨となり肉となるべきは肉となるこれを滋養の精分といふ其瀝分たる糟かすは大小便となり汗となりて外に洩らし新陳交代以て一身を養ふとぞ是人身究理の大法なりされば今食物の良否は其中に含める滋養の精分の多きと少きとに由て鑑定すべきなり鳥獸とらげもの、魚類、牛乳、玉子等には此精分多き芋、大根、青菜、米の類には精分少し故に一切の牛肉の中には拾斤の芋よりも精分多し、一杯の牛乳は十本の大根よりも精分を含むこと多し古來我日本人此理に暗く食物の容量かさをさへ多く喰へば養になること、心得ひじき、あぶらげ、芋、南瓜なんきん、腹のふとるを限とし咽喉のどから出るまで取込とりこみて嗚呼澤山なりと満足しけれどもこは唯腹を満みたすのみ

身體を養ふにあらず木片に等しきひじきあらめ
何ぞ人身の滋養とならん皆悉く尿となりて外に洩
れ人の腹中は恰も是尿小便の取次所喰てはたれ、
飲てはたれ、そこらだらけが尿だらけ古人の所謂
喰ふて尿して寢て起てとはこのことならん大切な
る人の身體にあるまじきことなり或は又江戸子は
だなど唱ふる馬鹿者錢を棄るを通と稱し十月の竹
ノ子二月の初茄子蛤を殺して松魚を喰ひ羽織をま
げて白魚を買ひ自から得意の色を爲せば人亦これ
をゑらいと稱すこは物を喰ふにあらず物に喰はる
ゝなり茄子と竹ノ子何の滋養となる一個壹歩の初
茄子も其功能は四文の菜葉に同じ野菜に露の命を
つなぎ顔の色は菜葉と共に青く智慧分別は芋莖に
似て空し皆是物事の道理を知らざる食物の不養生
より生ずる悪弊なり古人云く美人薄命才子多病と
は毛唐人の寢言の眞似今の開化の世の中に病身者
と馬鹿ものとはなくともなくとも事缺かず彼の西

洋の諺に才智は無事の身にやどると身體ありての
才知なり才知ありての文明開化其身體を養はんに
は滋養の精分多き物を喰はざるべからず此度我千
里軒の開店も徒に世の奢侈を助け成すにあらず專
ら西洋調理の法に倣て滋養の品を進め廣く世人を
して身體榮養の貴を知らしめんとするの婆心のみ
とは是れ全く主人の口實其内實を尋れば唯萬客の
光顧を祈り己が家業の繁昌を妄に求る欲心ならん
乎凡そ四方の君子身體を健康にし才智を養ひ世の
文明開化を助けて報國盡忠の大義を遂げんには先
づ我千里軒に來り此滋味を嘗て後に事を謀り給ふ
べし料理の價の如きも固より廉ならずと雖ども彼
の百疋の初茄子に比すれば土の如きのみ

辛未四月 千里軒主人 頓首百拜

其二

註 明治七八年頃の執筆か？ 原稿は文末に（未完）と記して

これを抹削した跡がある。「参考」華族を武邊に導くの説(續
七―四三二)

國 民 兵

國民兵トハ全國ノ男子幾歲ノ年齢ニ達スレバ其
身分ノ如何ヲ問ハズ徴シテ以テ兵ニ役スルノ法ナ
リ今ノ日本ノ徴兵ノ如キ是ナリ或ハ西洋ニ於テモ
其國ノ慣行ニ從ヒ兵士ノ給料ヲ定メ人々ノ所望ニ
任セテ之ヲ募集スルコト今ノ日本ノ巡查ヲ募集スル
ガ如キ法モアリ各利害アレハ國民兵ノ利益ヲ舉レ
バ全國ノ男子ヲシテ悉皆兵事ニ慣レシメ其在役ハ
二三年ニシテ故郷ニ歸ルモ一旦事アルニ臨テハ政
府ヨリ武器ヲサヘ授レバ皆起テ兵士タル可シ且其
平時ニ於テモ國民ニ武ノ氣象ヲ養フテ一國ノ風ヲ
シテ快活ナラシムルノ功アリト云フ蓋シ我輩モ亦
國民ノ法ヲ贊成スルモノナリ又封建武士ノ法ハ全
ク之ニ異ニシテ兵役ハ獨リ武家ノ知ル所ニシテ世
襲ノ祿ニ養ハレ其年齢ノ老少ニ拘ハラズ苟モ役ニ

堪ル者ハ之ニ就クノ法ナリ方今西洋各國ニ此法ナ
シ我日本ニ於テモ數年前ニ之ヲ廢シタリ

抑モ兵隊ハ一國ノ齒牙ニシテ外敵ヲ禦テ自國ノ
獨權ヲ維持スルノ法ハ唯兵ニ在ルノミ又或ハ假令
ヒ外敵ノ患ナキモ一國內ニ在テ一政府ノ權力ヲ保
護シテ政令ノ施行ヲ助ルニモ亦兵ヲ要ス蓋シ國民
ハ必ズシモ善良柔順ナル者ニ非ズ往々亂民ヲ生ジ
テ政府ヲ害シタルノ例少ナカラザレバナリ故ニ德
義ノ談ヲ閣キ此一點ノミニ就テ論ズレバ政府タル
者ガ一國ノタメ又一政府ノタメニ兵ヲ養フハ獅子
ガ其齒牙ヲ研テ之ヲ保護スルガ如クセザル可ラズ
西洋文明ノ各國ニ於テモ皆然ラザルハナシ然ルニ
爰ニ兵力ヲ恃テ國內ノ政ヲ施サントスルニ當リ國
民兵ノ法ト封建武士ノ制ト孰レガ便利ナルヤト尋
レバ必ズシモ封建武士ノ制ニ非ザレバ不可ナリト
答ヘザルヲ得ズ例ヘバ在昔我國ノ武家ハ世襲ノ祿
ニ養ハレテ一家ノ生計ヲ其政府ニ托スルノミナラ

ズ朋友ノ交際一身ノ榮辱モ皆唯政府ノミヲ目的トシテ人民ニ對シテハ恰モ別乾坤ノ姿ヲ成スガ故ニ民間ニ如何ナル變動アルモ其變動ハ武家ニ波及スルヲ得ズ民間ニ如何ナル議論アルモ武家ハ之ニ耳ヲ傾ルヲ須ヒズ饑饉ノ年ニ苛稅ヲ課スルハ農家ノ難澁ナラント雖モ武家ニ於テハ祿米ヲサヘ受領スレバ民間ノ苦ハ之ヲ不問ニ附シテ可ナリ之ヲ要スルニ人民ノ苦樂ハ以テ武家ノ喜憂ヲ爲スニ足ラザルモノナレバ政府ニ於テモ專ラ此武家ニ依頼シテ施政ノ權力ヲ張り唯武家ノ心ヲサヘ得レバ人民ヲ制シ或ハ少シク人民ノ意ニ戻ルモ國ヲ治ルコト甚ダ容易ナリキ然ルニ封建ノ制度ヲ廢シテ武家ノ常職ヲ解キ國民兵ノ制ニ改メタル上ハ事情全ク一變シテ國ヲ治ルニ人民ノ意ニ戻テ之ヲ制スルコト難シ如何トナレバ國民兵ノ兵士ハ全國ノ人民ヨリ募集スル所ニシテ固ヨリ人民ト利害ヲ同フシ喜憂ヲ共ニシテ其心志ノ赴ク所自カラ全國一般ノ時論ト方向ヲ同フセザルヲ得ズ而シテ其時論ナルモノガ時ノ政府ノ論ト略相投シテ大ナル差違ナケレバ則チ可ナリト雖モ若シモ然ラズシテ政府ノ所見ト國民ノ所見ト次第ニ相分レテ遂ニ大ニ齟齬スルニ至ルキハ其國民ヨリ出タル國民兵ノ所見モ亦政府ノ所見ト齟齬スルコトアル可シ蓋シ國民兵ノ法ニ由テ徵シタル徵兵ハ在役三年家ニ歸テ舊業ニ復スルモノナレバ其兵役ハ固ヨリ生涯ノ身ヲ托スル職業ニ非ズ生計ノ所在ニ非ズ安樂ノ所在ニ非ズ或ハ其間ニ仲間ノ交際モアリ榮辱ノ感覺モ盛ニシテ一時ノ愉快ナキニ非ザレモ其一心ハ常ニ既往將來ノ有様ヲ想起サルヲ得ズ三年前ハ故郷ノ人ナリキ三年ヲ經テ去テ故郷ニ歸レバ純然タル一鄉民ニシテ一家ノ生計モ一身ノ交際モ貧富榮辱皆其鄉黨朋友ヲ目的トセザルヲ得ズ即チ兵士在役ノ間其身ハ軍法ニ制シラル、モ其思想ハ常ニ鄉黨朋友ニ左右セラル、者ト云フ可シ之ヲ彼ノ世祿ノ武士ガ其身ノ生涯ノ

ミナラズ祖先以來子々孫々ニ至ルマデモ其生計榮
譽ヲ舉ゲテ政府ニ托シタル者ニ比スレバ固ヨリ同
年ノ論ニ非ズ故ニ國民兵ノ法ヲ以テ編成シタル兵
士ノ心ヲ得ントスルニハ先ヅ其出處ノ本源タル國
民全體ノ心ヲ收攬スルヲ緊要ナリ人ノ心ハ動モス
レバ眼ニ由テ歎カル、モノナリ昔ノ武家ヲ見タル
眼ヲ以テ今ノ兵士ヲ見レバ等シク武士ニシテ然カ
モヨク政府ニ密着シタル者ナレバ其性質マデモ亦
一樣ナリト思フモノナキヲ期ス可ラズト雖凡要用
ノ時ニ此國民兵ノ力ヲ以テ國民ヲ治メントスルノ
場合ニ至テハ大ニ昔ノ武家ニ異ナル所ノモノアル
可キナリ

其 三

註

三田演說會に於ける演說の草稿であらう。紙端に「明九

三月十八日」と記してある。「参考」文學會員に告ぐ(續七

—四七四)

前會ニハ奢侈ニ流ル、ノ弊ヲ痛ク述ベタレ凡

或ハ云ハン奢侈ト質朴トハ傍ヨリ之ヲ論ズルヲ甚
ダ易カラズ世ノ人ハ萬人ハ萬人必ズシモ其好尚ノ
趣ヲ一ニスルモノニ非ズ或ハ萬人ハ萬人各コレヲ
異ニスルト云フモ可ナリ故ニ飲食ニ質朴ニシテ衣
服ニ奢侈ナルモノアリ或ハ衣食共ニ粗ニシテ居室
ヲ美ニスルモノアリ或ハ衣食居室共ニ之ヲ度外ニ置
テ遊樂旅行家ノ外ニ出デ、錢ヲ費スヲ悦ブ者モア
リ一樣ニ之ヲ論ズ可ラザルナリト

此言誠ニ是ナリ奢侈ノ一事ニ就キヨク其性質ヲ
解剖シテ論ジタルモノト云フ可シ然リト雖凡學者
ノ眼力既ニ此邊シテ稍ヤ高尚ナル理論ヲ欲スルヲ
ナラバ余輩固ヨリ之ヲ辭セズ無智ノ小兒ニ向テ其
無狀ヲ叱咤スルガ如キ儉約論ハ之ヲ止メ今一步ヲ
進メテ論ズル所アル可シ

人生ヲ肉體ト精神トノ兩様ニ分析セバ何レヲ重
トシ何レヲ輕トスルヤ肉體ノ慾ハ禽獸ト之ヲ共ニ
スルモノ多シ人生ヲ全フシテ萬物ノ靈タランニハ

其靈神ヲ養テ肉體ノ慾ヲ後ニシ勉メテ人ノ禽獸ニ
異ナル所以ノ區別ヲ明ニシテ一箇條ニテモ人獸ノ
區別ヲ多クシ一步ニテモ其距離ヲ遠クスルヲ以テ
人生終身ノ職分ト云フ可キナリ
サレバ今彼ノ奢侈ナルモノ、性質ヲ詳ニスルハ
ハ概シテ之ヲ肉體ニ屬スルモノト云ハザルヲ得ズ
人生ニ必要ナル事物ノ内ニテ下等ニ位スルモノト
云ハザルヲ得ズ

人又云ク奢侈ノ箇條必スシモ肉體ニ屬スルモノ
ト限ル可ラズ人生ヲ全フセンニハ風韻ナカル可ラ
ス月風ヲ樂ミ詩歌ヲ悦ビ音樂ヲ嗜ミ書畫ヲ好ム等
頗ル高尚ナルモノニシテ或ハ之ヲ人事ノ至極ト云
フモ可ナリ然ルニ有用無用ノ點ヨリ論スレハ之ヲ
奢侈ノ譏ヲ免カレ難シト答テ云ク人生ノ職分ノ前
後ノ區別アリ

- 第一 一身ヲ保護ス 怪我ヲセズ養生
- 第二 生計ノタメノ學問

福澤先生資料拾遺(富田)

第三 子ヲ教育ス

第四 社會ノ勤

第五 遊樂風韻

故ニ遊樂風韻ハ最末ニ位ス今ノ日本人ハヨク第
一ヨリ第四マテノ職分ヲ盡シタルヤ決シテ是レナ
シ之ヲ全國ノ欠典ト云フ可シ故ニ今日ニ在テハ風
韻ノ遁辭ヲ許ス可ラス

其 四

註 此原稿は書きかけの儘、途中で筆が切れてゐる。筆蹟から
見ると明治十年頃までのものと思はれる。

人ノ一身ノ進退ヲ制シ世間世一般ノ人事ヲ支配
スル三大箇條トハ第一生命ナリ第二榮辱ナリ第三
私有ナリ此三者ノカヲ及ホス一其釣合ヲ得テ一人
ノ身モ立チ世間ノ交際モ全キヲ得ヘキコナリ近日
世上ノ有様ヲ視ルニ三者ノ釣合或ハ其宜ヲ失スル
モノアルガ如シ其宜ヲ失スルトハ第三者獨リカヲ

(五七)

一七一

得テ第一二者ヲ壓スルノ一事ナリ方今人心ノ騷亂、舊ヲ棄テ、新ニ就キ改革進取ノ大勢ニ當タル世ノ中ナレバ人心ノ赴ク所、進テ富ヲ取ラントスルモ強チ咎ム可キニ非ス富ヲ求ルノ慾モ亦是一種ノ鞭撻ニシテ文明ノタメニ貴重ナル器械ト云フ可シ然リト雖此器械ニ鞭撻セラレテ心志ノ方向ヲ定メ人生最上ノ目的ト爲スモノハ之ヲ中人以下ノ行狀ト云ハサルヲ得ズ中人以下ハ以テ許ス可シト雖此以上ノ人ニ向テハ更ニ多ヲ求メサル可ラズ學者士君子ハ榮辱ヲ以テ最上ノ目的ト爲サ、ル可ラサルナリ

等シク是レ一國ノ人民ナルニ獨リ中人以上學者士君子ニ限リテ榮辱ヲ重ンス可シトハ不都合ナルニ似タリ凡ソ人ノ名アル者ナレバ共ニ此大義ヲ守ル可キ筈ナレ此如何セン衣食未タ足ラサル小民ニ向テ之ヲ責ム可ラス假令ヒ或ハ衣食ニ乏シカラサル者ニテモ知見未タ發達セサル者ハ榮辱ヲ辨スル

ニ由ナシ古人ノ語ニ知字憂患ノ始ト云フコトアリ蓋シ字ヲ知リ理ヲ辨スル者ハ隨テ又榮辱ノタメニ心配モ増ストノ意ナラン今ノ世界ハ文明未全ノ世ノ中ト云ハサルヲ得ス文明未全ナレハ人ノ行狀ニモ固ヨリ缺典ナカル可ラス此ノ所餘ヲ以テ彼ノ所缺ヲ補ヒ不滿ナカラモ僅ニ禽獸ノ境界ヲ脱シ得テ強ヒテ自カラ慰メ其缺ヲ補フノ多少ヲ見テ假ニ文明野蠻ト名稱ヲ下タスノミ今一國ノ人民ヲ集メテ之ヲ一身ニ譬ヘ中人以下ニ榮辱ノ念ノ薄キハ半身不隨ナルガ如シ一人ノ體ニシテ左ノ半身不隨ナラバ必ス右ノ手足ヲ以テ左ノ弱ヲ助ルコトナラン此事誠ニ是ナラバ

其 五

註 明治十年西南戦争の起つた時に記されたものであらう。文意より見て當時世に公けにすることが出来ないであらうと思はれるから、記して置いて親しい友人などに示されたものであらうと思はれる。「参考」丁丑公論（正六一四七五）南洲

西郷隆盛翁銅像石碣建設主意(續七一三六三) 西郷隆盛の處
分に關する建白書(續七一四二三)

此度薩州ノ動亂ニ付人民ハ之ヲ傍觀シテ何レニ
左袒スルニモ非ス民情冷ニシテ水ノ如シ甚シキハ
薩ノ敗ヲ聞テ力ヲ落ス者アルガ如シ怪シカラヌヲ
ナリ

今其然ル所以ヲ尋ルニ政府ハ三五年以來祿制ヲ
以テ華士族ヲ敵ニシ新聞條令ヲ以テ學者ヲ敵ニシ
地租改正ヲ以テ農民ヲ敵ニシ滿天下政府ノ味方ナ
ル者ナキガ故ナリ今ノ政府ノ依頼スル所ノモノハ
唯七千萬圓ノ歲入アルノミ

又政府ノ基ヲ開クヤ僅ニ十年ニ足ラズシテ未タ
人民ノ心ヲ得ス故ニ今ノ事物ノ順序ヲバ政府ニ歸
セズシテ凡ソ一身ニ不平アル者ハ其性質ノ公私ヲ
問ハス悉皆コレヲ政府ニ歸シテ政府ハ恰モ不平ノ
府ナルガ如シ即チ人民ノ却テ薩ヲ左袒スル者アル
所以ナリ畢竟人民ノ愚ニシテ政府ノ拙ナルニ由テ

福澤先生資料拾遺(富田)

致ス所ナリ

愚民ノ評論ハ取ルニ足ラズトシテ姑クコレヲ閣
キ學者ノ理論ニ於テ今般ノ勝敗ニ付キ其利害如何
ヲ吟味スルハ余ガ考ハ左ノ如シ

凡ソ事物ノ利害ヲ論スルニハ先ツ其爲ニスル所
ノ目的ヲ定ルヲ緊要ナリ此度ノ勝敗ニ付キ全國ノ
道德ヲ目的トセン歟薩人モ私ノ爲ニ非ス政府ノ人
モ私ノ爲ニ非ス薩人忠義ナリ政府人モ忠義ナリ何
レガ勝ツモ日本ノ德義ニ妨アルヲナシ

天子ヲ目的トシテ論セン歟薩人勝ツモ主上ニ害
ヲ加ヘサルハ明ナリ或ハ上ヲ重ンスルノ念ハ却テ
今ノ政府人ヨリモ熱カラン故ニ此成敗ハ天皇陛下
ノ利害ニ關スルヲナシ

華士族ノ爲ヲ謀ラン歟薩人勝利ヲ得ルモ此族ノ
有様ハ今ヨリ頓ニ變スルヲアル可ラズ

農工商ノ爲ヲ謀ラン歟租稅今ヨリ増減ス可ラズ
或ハ一時減スルモ亦増シテ今ノ如クナル可シ

(五九)

一七三

政體ヲ目的トシテ論スレバ薩人勝利ヲ得ルハ必ス一時新政ヲ布キ人民ニ權利ヲ許シ學者ノ說ヲ容ル、ハ必セリト雖モ到底武人ナルカ故ニ戰爭ニハ勝利ヲ得ルモ事務ニハ降參シテ又小俗吏輩ニ欺カル、トアル可シ

政府勝利ナレバ益今ノ政路ニ從ヒ得々トシテ顧ルトナキ歟又ハ内ニ自カラ不和ヲ生シ何事モ舉ルトナカル可シ何レニモ政治上ニハ損徳利害アルトナシ

經濟上ニテ云へハ薩人ハ一時儉約ヲ主張ス可シト雖モ前條ノ如ク小吏ニ欺カレテ必ス後ニハ浪費ノ弊ヲ免カレ難シ

政府ハ此度勝利ヲ得ルハ内實ハ困弊スルモ外見ヲ張リ大病人ニ神經症ノ高マリタルカ如ク益錢ヲ費ストアル可シ是亦双方ノ成敗ニ付利害ノ異ナルヲ見ズ

右ノ如ク道德ノ爲ニモ天子ノ一身ノ爲ニモ華士

族農商ノ爲ニモ政治ノ爲ニモ經濟ノ爲ニモ此度ノ勝敗ハ其利害ニ關スルトナシ

唯政府ノ勝利ヲ得テ國ノ爲ニ利アラント思フトハ武力ヲ以テ容易ニ政府ヲ覆スノ慣習ヲ遺サズ外國ニ對シテ國ノ體裁ヲ失ハサルノ一事ノミ是レトテ今ヨリ別段ノ利ヲ起シタルニ非ス辛シテ害ヲ免カレタルノミ結局人ヲ殺シ財ヲ損シ加之向後ノ成行キ必ス士族ノ氣力ヲ失ハシメ政府專制ノ慣習ヲ養成シ開化ノ歩ヲ遅々タラシムルハ此度ノ戰爭ノ餘害ナリ之ヲ是レ三五年前ニ豫防セサルハ何ソヤ遺憾少ナカラサルナリ

其 六

註 筆蹟に據れば明治十年以後のものと思はれる。「参考」帝室論(正五―四三九)尊王論(正六―二三七)

乘輿ニ觸ル、ノ罪人

聖人不_レ死大盜不_レ止割_レ斗折_レ衡而民不_レ爭トハ

洗洋タル漫言ニシテ之ヲ解スルヲ易カラズツラツ
ラ人間社會ノ事相ヲ觀ルニ罪ヲ犯ス者アルガ故ニ
法ヲ作ルモノアリ或ハ法ヲ作りタルガ爲ニ罪ノ顯
ハル、モノアリ蓋シ未ダ法ヲ作ラザルノ時ニ於テ
ハ罪ト稱ス可ラザルモノモ法ノ條款ニ之ヲ掲ゲタ
ルガ爲ニ罪ノ名ヲ免カレザルモノナリ例ヘバ在昔
親ニシテ子ヲ殺スモ大抵ハ無罪ナリシモ維新ノ新
法ニ於テハ之ヲ殺人ノ刑ニ處ス即チ舊政府ノ時代
ニ隱レタル罪ガ今ノ世ニ顯ハレタルモノナリ或ハ
又コレニ反シテ持兇器強盜ハ在昔人ヲ殺サズ物ヲ
奪ハザルモ死罪タリシ者ガ今日ハ兇器ヲ持スルモ
之ヲ用ルニ非ザレバ死刑ヲ免カル即チ昔ニ顯ハレ
タル罪ガ今日ハ隱レタルモノナリ左レバ剖レ斗折レ
衡而民不爭トハ法律ヲ廢スレバ罪人跡ヲ絶ツトノ
意味ナラント思ヘドモ實際ニ於テ法ノ條款ノ有無
ニ由テ罪ノ隱顯アルノミニシテ法律ヲ廢スレバト
テ罪人ノ跡ヲ絶ツハ難キコナラン我輩ハ固ヨリ文

明ノ世ニ居テ文明ノ法律ヲ贊成スルモノナレモ爰
ニ不思議ナルハ明治八年ノ頃政府ニテ讒謗律ナル
モノヲ頒布シ其中ニ言乘輿ニ觸ル、者ハ云々ト條
款ヲ掲ゲシヨリ爾來世間ノ新聞記者又演說者ニシ
テ此罪ヲ犯スモノアリ抑モ政府ガ當初コノ法律ノ
箇條ヲ設ケタルハ現ニ世間ニ斯ル罪人アリシカモ
之ヲ罰スルノ法ナカリシガ故ニ之ヲ設ケタルモノ
歟然ル片ハ此法ハ罪人アルガ爲ニ作りタル法ナリ
或ハ日本國中ニ斯ル罪人ヲ出ダシタルコトモナク又
出ダス可キ前徵モナカリシナレモ遙ニ前途ノ豫防
ノ爲ニ設ケ置キタルモノガ偶然ニモ法律頒布以來
罪人ヲ出シテ偶然ニモ其法律ヲシテ效ヲ奏セシメ
タルモノ歟不思議ナリト云フ可シ元來日本國中ニ
乘輿ニ觸ル、ガ如キ言ヲ吐ク者アレバ假令ヒ成文
ノ律ナキモ臨時ノ法ヲ以テ之ヲ罰セザル可ラズ又
必ズ罰シタルコトナラン然ルニ新聞演說ノ條例ヲ頒
布セザル前ニハ曾テ一名ノ罪人ナクシテ條例ノ發

行ト共ニ爾來續々此罪人ヲ出ダスハ日本人民ノ氣風將サニ此罪ヲ犯サントスルノ其時機ニ當テ偶然ニ此法律ヲ發行シタルモノナラン立法者ノ先見明ナリト云フ可シ

新聞演說ノ條例ニ乘輿ニ觸ル、云々ノ條ヲ掲ゲタルハ立法者ノ先見ニモセヨ又偶然ノ事ニモセヨ現ニ斯ル大罪ヲ犯ス者ヲ罰スルハ至當ノコトニシテ我輩ハ毫モ其罪ヲ假スヲ好マズ嚴ニ之ヲ處スルコト甚ダ愉快ナリト雖其局處ヲ去テ事ノ全面ヲ見レバ誠ニ不祥ナリトシテ痛嘆セザルヲ得ズ天下後世子孫ノ時代ニ在テ今日ノ歴史ヲ繙キ明治何年ノ頃ハ云々ノ罪ヲ犯ス者多クシテ云々ノ刑ニ處セラレタリト讀ミタラバ必ズ愉快ナル感覺ヲ起サズシテ今日ノ我同胞兄弟ヲ狂愚ナリトテ咎ルコトナラン、先人ハ何故ニ明治ノ聖代ニ居テ斯ル大罪ヲ犯シタルナラント之ヲ訝ルコトナラン、我輩聊カ子孫ニ對シテ慚愧ノ情ナキヲ得ザルナリ依テ爰ニ我輩ノ祈

ル所ハ今後若シモ不幸ニシテ同罪ノ者ヲ得タラバ當ニ其罪狀ヲ糾問スルノミナラズ其身心ニ就キ人身生理上ニ體質諸機關ヲ吟味シ心學上ニ精神ノ働ヲ審査シテ若シ或ハ心身變常ノ病ニ原因シタルモノアラバ之ヲ刑法ニ問ハズシテ病院ニ投ズルノ一事ナリ病ハ時々ノ流行ニ從テ何病ヲ發スルモ計ル可ラズ明治年間一種ノ癡狂多キモ我輩ハ後世子孫ニ愧ヂザルナリ但シ此罪人ナルモノガ果シテ病ニ原因シテ罪ヲ犯シタリトスルモ尋常一樣ノ患者ト其取扱ヲ同等ニス可キニ非ズ一種ノ病院ニ投ジテ徐々ニ其回復ノ期ヲ待ツ可シ昔年英國ニ於テ國帝ヲ狙撃セント企テタル狂人アリテ癡狂院ニ投セラレタリシガ此狂人ハ醫師ノ診斷ニテ全癒ヲ告ルモ退院ヲ許サズト云フ左レバ我國ニテ乘輿ニ觸レタル狂病者モアラバ之ヲ一種ノ病院ニ投ジテ假令ヒ全癒ヲ告ルモ尙再發ヲ慮リテ其滯院ノ期間ハ如何様ニモ爲シテ可ナランノミ

人若シ我輩ノ所望ヲ過分ナリトセズシテ尙其十分ナル所ヲ吐露セヨトノコナラバ敢テ吐露ス可キモノアリ抑モ罪人ニテモ病人ニテモ之ヲ惡ムハ臣子ノ情ニシテ其肉ヲモ食ハントスルハ當然ノ事ナリ然ルニ帝室ヨリ日本全國ヲ降臨シ給ヘバ一視同仁ニシテ惡ム可キモノアル可ラズ太陽ハ萬物ヲ偏ネク照ラシテ光明ノ及ブ所醜美ヲ撰ハズ、一滴ノ汚穢ハ河海ニ灌テ其清濁ヲ變スルニ足ラズ太陽ノ明ヲ妨ルコナク河海ノ清ヲ穢スコナカラシメントシテ穎敏ニ之ヲ保護スルハ朝野一般ノ至情ニシテ苟モ狂亂ノ暴人アレバ之ヲ法ニ罰シ又情ニ咎ルコト臣子ノ分ナレト帝室無限ノ仁ヲ以テ時トシテ此罪人ヲ寬典ニ處セラレントスルノ内命モアランニハ人民一般ノ感覺如何ナル可キヤ唯其大徳ノ不測ニ茫然タル可キノミ我輩ノ旨トスル所ハ固ヨリ大罪ヲ庇護セントスルニ非ズ故ニ假令ヒ内命ノ重キアルモ臣子タル者ハ其罪ヲ赦ス可ラズトテ争フコトナ

ラン争フテ或ハ聽カレザルモ可ナリ或ハ之ヲ争フタルガ爲ニ遂ニ罪ヲ赦スナキモ可ナリ唯コノ罪ノ性質タルヤ直ニ帝室ニ關スルモノナレバ特ニ帝室ノ美德ヲ發揚セントスルノ至情ヲ以テ敢テ此言ヲ爲スノミ

其七

註 明治十二年の執筆。其前年に發兌せる「通俗民權論」の第二編として起稿し、未完成のまま中途で筆を止められたものと思はれる。「参考」通俗民權論（正五―三七）

第一章

民權ハ門閥ノ反對ニシテ今ノ日本ハ民權ノ主義ヲ以テ社會ヲ成スモノナリ

日本ニテ民權論ノ生シタル年月ハ未タ二十年ニ足ラズ其以前ハ邦人ノ全ク知ラザル所ニシテ此文字ヲ見タルコトモナシ安政年中友人某荷蘭ニ留學シテ當時「フアルケン・レフト」ノ事ヲ云々ト聞キ

扱々奇妙ナル學課モアルモノ哉コノ蘭語ノ字義ニ據テ考レバ何カ百姓ナドガ理窟ヲ論スルコトナラント推察スルノミニシテ明白ニ其主義ヲ合點スルコトモ出來ザリキ其後次第ニ外國ノ交際モ繁ク爲リ我輩モ次第ニ英書ノ讀方ヲ工夫勉強シテ或ハ書籍ニ依リ或ハ外人ノ言ニ由リ次第ニ聞見ノ博ク爲ルニ從ヒ今日ニシテ考レバ稍ヤ其意味ヲ了解シタルガ如ク自分ニモ覺ヘ世ノ人モ亦頻ニ之ヲ談論シテ怪シム者モナキニ至リシハ人ノ知識ノ進歩速ニシテ心情ノ變化急ナルモノト云フ可シ此有様ニシテ次第ニ進ミ今後又二十年ヲ過ギタラバ世ノ形勢如何ナル可キヤ抑モ我輩淺見ノ明知スル所ニ非サレモ世ノ中ハ廣キモノニシテ今日ニ在テモ尙民權ノ主義ニ付キ漠然トシテ之ヲ了解セサルコト二十年前ノ我輩ニ類スル人物ナキヲ期ス可ラズ依テ我輩ノ所見假令ヒ近淺ナルモ之ヲ述テ全ク無益ニモ非サル可ント思ヒ長クハ通谷民權論一冊ヲ發兌シ今又

其第二編ヲ記シテ以テ世ニ公ニセントス蓋シ深遠ノ理ヲ談シテ二十年後ノ利害ヲ判斷スルガ如キハ敢テ望ム所ニ非ス唯今ノ通俗ニ對シテ聊カニテモ益スルコトアラバ以テ記者ノ満足タル可キノミ抑モ民權ノ權ノ字ハ必スシモ社會ノ人民ガ政府ニ對シテ其一分ヲ主張スルノミノ謂ニ非ズ權ノ字義ハ初編第一章ニ詳ナリ父兄ノ權アリ子弟ノ權アリ主人ノ權アリ從者ノ權アリ貸者借者賣者買者凡ソ人間社會爰ニ一場ノ關係ヲ生シテ此レト彼レト相對スレバ其間ニ權アラザルハナシ十錢ノ金ヲ車夫ニ拂ヘバ一里ノ路ヲ車ニ乗ルノ權アリ車ニ客ヲ乗セテ一里ノ路ヲ走レバ十錢金ヲ受取ルノ權アリ甚タ通常明白ナル事柄ニシテ毫モ珍ラシキモノニ非ス斯ノ如ク人間萬事些細ノ箇條ニ至ルマテ權ノ字ノ主義ハ行ハレナガラ獨リ民權トノミ世上ニ喧シキ其原因ハ何故ト尋ルニ民權ノ民ノ字ヲ人民ノ義ニ解シテ人民ト改付ト双方ニ相對スレバ其關係ハ人間社會中ニ最

、ガ故ニ自カラ其字面モ世ニ顯ハレタルヲナラン
然リト雖モ余ガ爰ニ記ス所ノ民權ハ必スシモ政府
ニ對スルノミノ義ニ非ス唯一國ノ人民タル者ガ社
會ノ中ニ居テ其一分ヲ守リ家ニ在テハ家ノ權利ヲ
主張シ村ニ在テハ村ノ權利ヲ伸ハシ内外公私毫モ
屈スル所ナクシテ遂ニハ以テ國權ヲ保護シ又コレ
ヲ皇張セントスルノ旨ナレバ其字義ノ及フ所廣キ
モノト知ル可シ

二十年前民權ノ論ナクシテ爾後始テ其論ヲ聞キ
其主義ノ世ニ行ハレテ妨ナキハ之ヲ人心ノ變動ト
云ハザルヲ得ズ其變動トハ舊ヲ厭フテ新ニ就クコ
ナリ即チ舊キ門閥ノ無理壓制ヲ厭ヒ盡シテ新奇ナ
ル西洋說ニ從タルモノナリ此二十年ノ間ニハ舊幕
府ヲ倒シテ新政府ヲ設ケ社會ノ動搖モ隨分大ナリ
シト雖モ政府ノ革命ハ人事ノ常ニシテ左マデ珍ラ
シキコニアラズ唯數年ノ間ニ天下ノ人心ヲ全ク一

變シタルノ事實ニ至ラハ古來未ダ曾テ其類例ヲモ
見ザル所ニシテ實ニ我輩ヲシテ驚駭セシムルモノ
ナリ在昔足利亡ヒテ織田豐臣興リ豐臣敗シテ徳川
コレニ代ル等何レモ社會ノ動搖ナレモ其動搖ハ唯
政府ノミニ止テ天下ノ人心ニ毫モ變化スル所ヲ見
ズ足利ノ昔ヨリ徳川ノ近代ニ至ルマデ社會ノ全面
ヲ支配スルモノハ一義到底ノ門閥保守ニシテ曾テ
事物ノ秩序ヲ紊ルコトナカリモノ二十年以來俄ニ民
權ノ議論ヲ生シテ舊物ヲ顛覆シタルハ何ソヤ他ナ
シ嘉永開國ノ一舉ヲ以テ西洋近時ノ文明ヲ我國ニ
入レ全國ノ人心ヲ一新シタルモノト云ハサルヲ得
ズ王政一新ノ如キハ頓ニ生シタルモノニ非ス先ツ
國人ノ心情ヲ一新シテ然後ニ政府ニ及ホシタル
一新ナレバ人心ノ一新ハ原因ニシテ政府ノ一新ハ
其結果ノ一箇條ト云フ可キノミサレバ民權論ハ正
シク門閥論ノ反對ニシテ今日既ニ其勢力ヲ得タル
ガ故ニ現今將來我日本國ニ於テ門閥ノ主義ハ地ヲ

ノ主義地ヲ拂テ無ニ歸シタリトハ即チ是ノ謂ナリ
尙細ニ互レバ平民ガ苗字ヲ唱ヘテ馬ニ乘リ穢多ガ
新平民ト爲リ娼妓ガ身賣リノ約束ヲ放解除シ寺ニ下
寺ノ稱呼ヲ廢シ家ニ本家ノ特權ヲ失ヒ地主小作大
家店借問屋株式御用達ノ類一切年來ノ由緒ヲ以テ
權ト利トヲ專ニシタル者ハ今日ニ在テハ毫モ其働
ヲ許サズ即チ人民社會ノ門閥ヲ廢シタルナリ門
閥ノ主義ハ正シク民權主義ノ反對ニシテ違フナキ
モノトスルハ嘉永ノ開國ヨリ今日ニ至ルマテ世
態ノ沿革ヲ察シテ我日本ノ社會ハ人ノ心情ヲ顛覆
一新シテ民權ノ世ニ變シタルモノト知ル可シ將來
ノ事ヲ前言スルハ人智ノ及フ所ニ非スト雖モ今後
我國ニ於テ朝野ノ人物ガ如何ナル大事業ヲ成シテ
社會ヲ益シ又コレヲ害スルコトアルモ其由緒ヲ以テ
其子孫ヲ輕重スルナキハ明ニ知ル可シ雷ニ子孫ニ
及ハサルノミナラズ其功業ノ世ニ明ニシテ後ニ見

ル可キモノナクシハ其身ノ生前ニ於テ其名ヲ埋沒
スルコトアル可シ今ノ世間ノ有志者ガ世ノ爲ニ事ヲ
起シテ之ヲ其家ノ名譽ニ歸セントシ或ハ政府ノ官
吏ガ久シク貴顯ノ地位ヲ占メテ其門戸ヲ子孫永久
ニ貴顯ナラシメントシ或ハ一生ノ間コレヲ保護セ
ントスルガ如キハ民權ノ朝ニ在テ門閥ノ殘夢未タ
醒メサル者ト云フ可キノミ

前ニ云ヘル如ク王政一新ハ畢竟人心一新ノ成跡
ニシテ即チ門閥論ト民權論トノ交代ナレバ之ガタ
メ古風ニ棲息スル輩ハ往々初ニ期シタル所ヲ誤ル
モノナキニ非ス薩長土三藩ニ將軍宣下ナキモ所期
ニ齟齬スルモノナリ諸藩ノ廢セラレタルハ最モ失
望ノ至ナリ神祇官モ立タズ神佛分離ノ論モ遂ニ行
ハレズ加之當初ニ約束シタル攘夷論ハ消シテ痕ナ
キノミナラス今ハ其醜視シタル夷狄ノ人ニ交リテ
餘念ナキニ非スヤ古風ノ輩ニハ甚々氣ノ毒ナルガ
如クナレモ大勢ノ赴ク所コレヲ如何トモス可ラズ

トシテ姑ク瞑目シ此流ノ人ノ不平ヲバ無理ニ壓制シ去テ爰ニ民權論ヲ以テ社會ノ大利益ヲ致シタルモノアリ即チ其利益トハ維新ノ後ニ尊王家ト佐幕家ノ結合ノ路ヲ得タルノ一事ナリ戊辰ノ以前幕臣ハ無論諸藩中ニテモ佐幕家ト稱スル輩ハ尊王攘夷ノ黨派ヲ惡ムト甚シク薩長土ヲ叛藩ト稱シ其一族ノ者ヲ浮浪ノ徒ト呼ヒ相互ニ軋轢シテ止マズ次テ伏見ノ一舉ニ東軍敗北シテ官軍勢ニ乘シ將ニ東下セントスル其時ニモ佐幕社中ハ屈スル色ナク或ハ之ヲ富士川箱根ニ要セント云ヒ或ハ海軍ヲ以テ賊ノ巢屈アタル京阪ヲ撃タント云ヒ當時關東ニテハ三藩ノ一族ヲ賊ト稱シタリ激論喋々タリシカハ天命如何トモス可ラズ關東ハ遂ニ謹慎恭順徳川家ハ駿遠參ノ地七十萬石ト定リテ佐幕連ハ恰モ亡國ノ遺臣尙其節ヲ改メズ、利ニ走ルノ新王臣タランヨリ寧口恩ヲ知ルノ舊幕族タラントテ東海俄ニ無數ノ伯夷叔齊ヲ生シタルハ封

ノ暇モナク僅ニ一兩年ニシテ此伯夷叔齊ガ漸ク其心事ヲ變シ漸ク首陽ノ籠ニ下リテ天朝ノ市ニ近キ官途ニ奔走シテ得々耻ル色モナク數年前ハ賊視シ浮浪視シタル其輩ヲバ今日ハ之ヲ引テ友ト爲シ之ニ依頼シテ其下風ニ棲息スルガ如キハ不可思議ニ非スヤ古風ノ眼ヲ以テ視レバ奇怪千萬破廉耻ノ甚シキ者ト云フ可ケレ余モ亦嘗テ此舉動ヲ見テ竊ニ怪マサルニ非ス然リト雖凡今一步ヲ進メテ考レバ又決シテ怪シムニ足ラサルノ事情アリ抑モ戊辰ノ革命ニ舊幕府ヲ倒シタル者ハ今ノ政府ニシテ功ニ之ヲ言ヘハ今ノ政府ハ徳川ノ敵ノ如クナレハ事實ハ則チ之ニ異ナリ新政府ハ徳川ヲ倒シタルニ非スシテ日本ノ門閥ヲ倒シタル者ナリ舊幕族ノ敵ニ非スシテ門閥論者ノ敵ナリ門閥論ノ反對ハ即チ民權論ニシテ直接ノ幕敵ニ非ザルト明ニ知ル可シ新政府ハ既ニ幕敵ニ非ス然ハ則チ昔年ノ尊王攘夷家ト佐幕家ト今日一處ニ結合シテ其間ニ軋轢ノ消

豈月島ノ世ニ蓋耳ト云フ可シ然レニ物換リ星移ル

滅シタルモ亦偶然ニ非ス或ハ佐幕社中ニモ尊王社中ニモ僞物少ナカラサレバ其出處ニ定節ナク舊ニ新ニ門閥ニ民權ニ其主義ノ如何ヲ問ハスシテ唯名利ノ存スル所ニ就テ出沒スル者モアラント雖凡畢竟一個人ノ心事ナレバ社會ノ全面ヨリ視テ毫モ妨トスルニ足ラズ唯今日民權論流行ノ世ニ於テ其論ニ一致シテ方向ヲ共ニスルハ人間ノ美事ト云フ可キノミ若シモ此革命ナルモノ古風ノ革命ニシテ源氏ガ平家ヲ滅シ徳川ガ豊臣ニ代リタルガ如ク舊門閥ヲ排シテ新門閥ヲ作ルモノナラバ佐幕ノ舊社中如何ニ無氣力ナルモ其新門閥ノ下風ニ立テ奔走スルノ醜體ニハ忍ヒサルコナラン之ニ忍フコ能ハサレバ復タ亂ヲ作スヨリ外ニ身ヲ處スルノ路アル可ラズ天下ノ不幸コレヨリ大ナルハナシ今其然ラザルモノハ之ヲ民權流行ノ功德ト云ハサルヲ得ズ前ニ云ヘル民權論ニ由テ社會ノ大利益ヲ得タリトハ即チ是ノ謂ナリ其功德實ニ大ナリト云フ可シ

故ニ
舊佐

幕ノ社中ニテ今日心事ノ安カラサル者ハ民權ノ眞意ヲ解スル事能ハスシテ枉テ今ノ社會ニ棲息者歟若シクハ之ヲ心ニ解シナガラ爲ニスル所アリテ尊王ノ假面ヲ被リ殊更ニ其主義ヲ喋々スル輩ナリ其心中ノ苦痛想見ル可シ……

其八

註 明治十二年の執筆。「民情一新」の補遺として起草されたもの。「参考」民情一新(正五—一六五)

世ノ人心ノ働ヲ察スルニ事實ニ由テ動クモノハ少ナクシテ評判ニ由テ動クモノヲ多シトス某ノ山ニ天駒アリ某ノ池ニ大蛇アリト云ヘリ其實物ハ固ヨリ無キモノニテモ唯評判ヲ以テ其有ルヲ信スル者多シ天下一人トシテ其天駒ヲ見タル者ナシトノ事實ヲ舉テ評判ノ虚ナルヲ證セントスルモ信スル者ハ多ク證スル者ハ寡ナリ衆寡敵セスシテ遂ニ之ヲ制ス可ラズ

抑モ封建世祿君主專制ノ世ニ在テ聖主明君固ヨリ無キニ非ス英雄豪傑固ヨリ少ナキニ非スト雖凡其人物ノ所業悉皆聖明ナル可キニ非ズ英雄豪傑モ

存外ニ失策多カラシキ事實ニ於テ然ル可シト雖モ如
何セン世上一般ノ評判ニハ其聖明英雄ヲ完全無缺
ノモノトシテ中心ニ之ヲ信シテ嘗テ間然スル者ア
ルコトナシ間マ或ハ其然ラサル所ノ事實ヲ摘發シテ
之ヲ證セントスルモ信者ハ衆ク證者ハ寡ク衆寡敵
セスシテ遂ニ其名ヲ成スコトナリ是即チ右ノ聖明英
雄ガ社會ノ人心ヲ籠絡シテ專制ヲ逞フスルヲ得タ
ル由縁ニシテ其趣ハ天駒ト大蛇ニ等シキ者ト知ル
可シ今日我輩中人以上ノ知見ヲ以テ考レバ殆ト怪
シム可キ程妄誕ナレモ古來天下ノ事實ニ於テ此妄
誕ノ行ハレテ人ヲ制シタルハ何ソヤ蓋シ偶然ニ非
サルナリ左ニ其次第ヲ語ラン

爰ニ聖主明君英雄豪傑ノ行事ヲ察シテ其缺典ヲ
枚擧スレハ固ヨリ多カラント雖モ自カラ聖明英傑
ノ質ヲ有シテ其一世ノ衆人ニ比スレバ必ス拔群ノ
人物タルヤ明ナリ既ニ拔群ノ質アリ他人ヨリ之ヲ
視テ自カラ爲ニ謀ヲ爲スニ此第一等ノ人物ニ抵抗

シテ之ヲ倒シ以テ自家ノ地位ヲ作ラン歟或ハ之ニ
依頼シテ共ニ事ヲ成サン歟之ヲ倒セバ己レ自カラ
第一流ノ地位ヲ占ム可シト雖モ其事難クシテ危シ
之ニ依頼スレバ事ヲ成スハ易シト雖モ第二流ノ地
位ニ非サレバ得ベカラズ其利害如何ヲ熟慮シテ十
中ノ八九ハ第二策ニ出ルヲ人心ノ常トス亂世ノ英
雄ガ主人ヲ撰テ之ニ仕ヘ耶蘇孔子ノ十哲ガ其師ニ
隨從スルガ如キ是ナリ其君臣師弟ノ間必ス天資ノ
異ナルモノアル歟又ハ勢ニ利不利アルノ故ヲ以テ
第一流ノ地位ヲバ他ニ讓リタルモノヨリ外ナラズ
徳川家康ノ英資ヲ以テ尙且暫クノ間ハ秀吉ニ附テ
其下風ニ隨從シタルコトアリ親鸞上人ガ始テ其宗ヲ
開テ舊佛者ノ意表ニ出タルガ如キハ世界古今ニ其
類甚タ稀ナル可シ人心ノ柔弱ニシテ獨立ノ難キコ
以テ知ル可シ之ヲ要スルニ人間社會ニ獨立スル者
ハ少ナクシテ人ニ依頼スル者ハ多シト云ハザルヲ
得ズ既ニ人ニ依頼シテ其人ヲ長上ノ地位ニ置クハ

ハ其長上ノ強大ハ即チ部下ノ勢力ト爲リ其美德ハ
即チ部下ノ名聲ト爲リ上下相共ニ利害得失ヲ與ニ
シテ其間ニハ自カラ又相親シムノ情ヲ生ズ君臣上
下老少師弟先進後進本家末流等ノ情義ト名ルモノ
即是ナリ畢竟人心ノ私ニシテ此私心ナルモノ他ニ
對シテハ私ナレモ其社會ノ中ニ在テハ則チ公然タ
ル公義ニシテ之ヲ大ニスレバ國惡ヲ諱ムト云ヒ之
ヲ小ニスレバ名譽ヲ保護スト稱シ強ヒテ長上ノ美
ヲ揚ケテ其惡ヲ掩ヒ甚シキハ牽強附會ノ說ヲ作テ
外面ヲ裝ヒ以テ小兒ノ戲ヲ爲スニ至ルモノ少ナカ
ラズ部下ノ輩モ自カラ其說ノ妄誕ナルヲ知ラサル
ニ非スト雖モ之ニ瞑目シテ問ハサルバ其社會ノ情
義ニ於テ然ルモノナリ故ニ古來ノ聖明英雄ガヨク
其英明ノ名ヲ成ス所以ノ原因ハ其社會一般ノ利益
ニ生シテ一般ノ熱心ニ出ルモノヨリ外ナラズ之ヲ
實物ニシテ譬フレバ聖明英雄ノ行事ニハ恰モ日向
ノ陽ト日蔭ノ陰ト兩面ノ別アレモ天下一般ニ公然

トシテ顯ハル、モ之ハ其日向ノミニシテ日蔭ノ暗
處ハ人ノ目ニ觸レサルガ如シ明德ハ陽ニ明ニシテ
半面ノ殘忍ハ陰ニ酷ナリ公平ハ日向ニ平ニシテ半
面ノ狡猾ハ日蔭ニ巧ナリ而シテ其陰陽表裏ノ痕跡
ヲ掩フモノハ他ナシ唯其社會一般ノ利益ニ由ルノ
ミ
又英明ノ人物一度ヒ勢力ヲ得レバ其下風ニ集ル
者ハ大抵皆一世ノ人才ニシテ或ハ武ヲ以テ人ヲ驚
カス者アリ或ハ之ヲ以テ鳴ル者アリ又或ハ道德品
行ヲ以テ世ヲ感動セシムル者モアラン此輩ノ言行
ハ世間ノ耳目ノ屬スル所ナレバ一言一行其勢力強
大ニシテ人心ヲ籠絡スルコト甚ダ易ク恰モ天下ノ龍
斷ヲ私シテ其社會ノ名望ニ横行獨歩ノ權ヲ占メ冥
々ノ間ニ世人ノ耳ヲ掩フテ其口ヲ拮スルモノ、如
シ又世間一般ノ人情ニ於テ文書言語ニ事物ノ實ヲ
云フハ甚タ面白カラズ特ニ人心ヲ感セシメントス
ルニハ必ス多少ノ裝飾ヲ要スルモノナリ之ヲ達意

ノ文飾ト稱ス殊ニ下等社會ノ人民又ハ少年ノ輩ニ對シテハ最モ此文飾ヲ用ルヲ緊要ナリトス譬ヘバ軍談師ノ如シ其武人ノ勇力ヲ語ルニ身ノ丈ケ一丈有餘ニシテ七十貫目ノ鐵ノ棒ヲ水車ニ振廻ハシ大聲一喝雷霆ノ轟クカト疑ハレ百万ノ敵ハ蜘蛛ノ子ヲ散ラスガ如シト云ヘバコソ聽衆ニモ面白ケレ若シモ軍談ノ高座ニ於テ老成ノ學者先生ガ事理ヲ談シテ一事一物モ其證據如何ヲ求ルガ如キアラバ誰カ之ニ耳ヲ傾ル者アランヤ然ルニ滔々タル無智文盲ノ俗世界ハ大抵皆軍談ノ聽衆ニシテ事理ヲ聞テ感スル者ハ稀ニシテ妄誕ヲ聞テ喜フ者ハ多シ英明ノ人物ハ既ニ自家ノ勢力ヲ以テ下等社會ヲ制シ下等社會ハ妄誕ヲ輕信シテ之ヲ喜ブ。其勢力ノ益盛ナルモ亦怪シムニ足ラサルナリ之ヲ歴史ニ徵スルニ書經ニ湯武ノ功業ヲ稱シテ桀紂ノ惡ヲ咎メ湯武ノ德至ラサル所ナク桀紂ノ不德至ラサル所ナキガ如クナレモ其書ハ湯武正ニ勝テ桀紂正ニ敗シタル

其時代ニ記シタルモノニシテ恰モ陽武自家ノ書ナレバ固ヨリ信スルニ足ラズ論語ニ紂ノ不善是ノ如ク甚シカラズトアレバ文武ノ德モ是ノ如ク盛ナラザルヤ明ナリ三百年前大阪ト關東トノ關係モ德川氏勝利ノ後ノ書類ニ記シ又口碑ニ傳ヘ。之ヲ傳ヘ又コレヲ傳ヘテ大阪方ノ人物ハ愚者ノ如ク怯夫ノ如ク又罪人ノ如クニ爲リタルヲナレモ今日ニ在テモヨク遺書ヲ調ヘ證據ヲ求メテ事實ヲ糺シタラバ三百年ノ間ニ傳ヘタル所ノモノニ大ナル相違ヲ見出スヲナラン畢竟俗世界ニ通用スルモノハ大半軍談流ノ妄誕ニ非サルハナシ英明ノ名譽ハ無學文盲ノ輕信ニ由テ其價ヲ増スヲ以テ知ル可シ

又人トシテ其身ニ直接ノ利害アラサレバ世ノ大勢ニ從フヲ常トス大勢ニサヘ從ヘバ直接ニ利ヲ得ザルモ間接ニ害ヲ蒙ルノ憂ナケレバナリ譬ヘバ若殿様ハ御發明ナリト稱シ上様ニハ斯ル難有思召アリト申シ彼ノ和尚ハ大德ナリ彼ノ先生ハ大家ナリ

ト云フガ如キ先ツ世上一般公私ノ談話ニ於テ毫モ
差支ナキトニシテ斯ク發言シテ假令ヒ人ニ譽メラ
ル、ナキモ咎メラル、ノ心配ハアル可ラズ加之其
甚シキニ至テハ假令ヒ心ニハ是非ヲ了解シテ明ニ
所見アルモ之ヲ口ニ發ス可ラサルモノアリ西洋諸
國ニテ耶蘇ノ宗教ニ疑ヲ起ス者ノ如シ明ニ所見ア
ルモ之ヲ發言ス可ラズ「ゼームル・ミル」ノ如キ
其一人ナリ我國ニテハ二十年前諸藩ノ小士族ノ如
シ其輩ノ中ニハ自身ノ有様ヲ顧ミテ或ハ不審ヲ起
シタル者モアラント雖凡門閥ノ大臣家ヲ倒サント
發言シタル者モナシ況ヤ君家ヲヤ如何ニ勇氣アル
學者ニテモ唯僅ニ心ノ底ニ不平ヲ抱クノミニシテ
之ヲ色ニ顯ハストモ叶ハザリキ畢竟人心ノ弱點ト
云フ可キモノナリ故ニ英明ノ人物ガ政治上ニ門閥
ヲ保チ或ハ世上ニ名譽ヲ成ス由縁ハ傍ヨリ之ヲ視
ル人ノ心ノ弱點ニ在ルモノ多シ

右ハ古來聖主明君英雄豪傑ノ一世ニ門閥ヲ成シ

テ專制ヲ逞フスルヲ得ルノ由縁ナレ凡我國外交ノ
一舉以テ西洋近時ノ文明ヲ入レテヨリ以來門閥ノ
舊套一モ依頼ス可キモノナキニ至リシハ人心ノ變
動社會ノ顛覆ト云フ可シ此一事ハ本年八月發兌シ
タル拙著民情一新ニ記シタレバ爰ニ論說ヲ要セザ
レ凡尙一二葉ノ紙ヲ費シ本編ノ旨ヲ全フシテ兼テ
又一新論ノ補遺ニ供スルノミ抑モ西洋近時ノ文明
ハ其箇條固ヨリ少ナカラズト雖凡就中有力ナルモ
ノハ蒸氣電信郵便印刷ノ法ヲ以テ人間交通ノ道ヲ
便利ニシタルノ一事ナリ之ヲ近時文明ノ利器ト云
フ二十年來我國ニモ此利器ヲ入レテ既ニ其一部分
ヲ利用スルトナレバ門閥專制ノ行ハル可ラサルハ
當然ノ勢ニシテ其反對ニ出ルモノハ必ス民權自由
ノ主義ナラサルヲ得ズ而シテ其原因ハ單ニ蒸氣電
信等有形物ニ非ザルハナシ然ハ則チ近時ノ文明ハ
有形ノ實物ヲ以テ無形ノ心情ヲ顛覆シタルモノト
云テ可ナラン今日我國ノ鐵道ハ未タ論スルニ足ラ

スト雖^モ既ニ沿海ヲ渡ルニハ蒸氣船アリ、陸路ヲ走ルニハ馬車人力車アリ、印刷ニハ活版ノ器械ヲ用ヒ、電信郵便ハ年ニ月ニ其及フ所ヲ弘メテ物ノ運送、人ノ往來音信報告却テ交通ノ便利ハ以前ニ百倍シテ民權モ亦隨テ百倍ノ勢力ヲ得タルガ如シ而シテ原因ヲ尋レバ唯西洋ニ行ハル、近時文明ノ元素ヲ入レタルモノ、ミ元來門閥專制ノ其力ヲ逞フスルハ唯交通ノ不便ヲ利シタルモノニシテ支那ニテ天子ノ居ヲ九重ト稱シ出入ニ喝道警蹕スルハ交通ヲ絶ツノ法ナリ日本ニテモ徳川ノ時代ニ將軍ノ御成ニ人ヲ拂フノミナラズ御老中ニテモ容易ニ人ニ接スルコトナキハ皆コノ趣意ナラン天子ハ九重ニ居リ御老中ハ廟堂ノ上ニ立テ全ク世間ト交通ヲ絶ツガ故ニ自カラ其尊嚴ヲ増シテヨク俗世界ヲ籠絡シ所謂其行事ノ半面ヲ以テ名聲ヲ專ニスルヲ得タルコトナレ^モ交通ノ路既ニ開ク^ルハ復タ他ノ半面ヲ掩フ可ラズ一言一行其醜美ノ兩面共ニ忽チ世上

一般ノ所知ト爲リ或ハ新聞紙ニ記シ或ハ演說ニ語リ之ヲ聞キ之ヲ傳ヘテ全國ニ流布シ虛誕妄說ノ通用ス可キ餘地ヲ遺サズ之ヲ要スルニ昔年ハ英明ノ人物獨リ名聲ノ龍斷ヲ私シタルモノ交通自在ノ今日ニ至テハ其龍斷ノ利ヲ全國中人以上ノ人民ニ掠奪セラレタルモノ、如シ方今西洋諸國ニ於テ國ノ權柄ハ中等ノ種族ニ在リト云フモ果シテ事實ナルヲ知ル可シ譬ヘバ在昔日蓮上人ガ相模國七里濱ノ龍ノ口ニ於テ斬罪ニ行ハレントシタル片ニ烈風雷雨其刀三ニ折レタリト俗間ノ妄說今ニ至ルマデ通用スルコトナレ^モ若シモ今日ニ在テ斯ル事變アリトセバ世上ニテ之ヲ許ス可キヤ新聞ノ探訪者ハ汽車ニ打乘リ二時ニ七里濱ニ駈付ケテ其實否ヲ糺シ翌朝ハ之ヲ紙上ニ記シテ全國ニ配達シ上人ノ虛誕ヲ摘發シテ毫モ之ヲ許サ^ズルコトナラン、サレバ六百年前ニ日蓮上人ガ其部下ノ輩ト共ニ様々ノ說ヲ作り又世間ノ好事家ガ其說ニ附會シテ人ヲ籠絡シ

タルモ唯當時ノ社會ニ交通ノ便ナラザルヲ利シル
タモノ、ミ又假ニ今ノ政府ノ顯官ガ舊幕府時代ノ
風ヲ學テ官省ノ出入又ハ參内ノ時ニ盛ニ行列ヲ裝
フテ人ヲ拂フ等外面ノ虚飾ヲ以テ貴顯ノ貴キヲ示
サントスルガ如キ事アラバ如何ン。假令ヒ何等ノ
方便ヲ用ルモ人民ハ決シテ其虚喝ニ恐レサルノミ
ナラズ却テ之ヲ噫笑スルニ至ル可シク是レ日
本ノ人民ニシテ舊幕府ノ時代ニハ直ニ其虚喝ニ屏
息シテ明治ノ今日ニ在テハ之ヲ噫笑ス其然ル由縁
ハ何ソヤ明治ノ社會ハ交通便利ニシテ人民ノ知見
ヲ博クシ顯官尊嚴ノ外裝ヲ見テ兼テ又其内實ヲ知
リ内外陰陽ノ兩面ヲ知リ盡シテ容易ニ驚駭セサル
者ナレバナリ。サレバ門閥專制ノ虚誕妄説ハ知見
ノ交換心情ノ通達ニ由テ全ク其勢力ヲ失フヤ明ナ
リ而シテ我日本ハ既ニ文明ノ利器ヲ用ヒテ交通ノ
路ヲ開キタリ民權論ノ日ニ増進スルハ固ヨリ必然
ノ勢ニシテ其趣ハ彈丸ノ既ニ砲口ヲ離レタルモノ

福澤先生資料拾遺(富田)

、如シ漫ニ其中止ヲ祈ル者コソ愚ト云フ可キノミ

其九

註 「時事新報」初期の社説草稿か

人各其志アリ又其才アリ固有ノ才力ヲ活用シテ
平生ノ志ヲ達セントスルハ普通ノ人情ニシテ然モ
此情ハ壯年進歩ノ輩ニ於テ最モ盛ナリトス所謂熱
心ナルモノナリ爰ニ世上ノ有様ヲ察スルニ少壯ノ
有志者ガ此熱心ヲ抱テ官途ニ就キ動モスレバ意ノ
如クナラスシテ私ニ不平ヲ鳴ラス者ナキニ非ス云
ク世人我ヲ知ラズ。長官我ヲ用ヒズ。我説行ハレ
ズ。我建言採用セラレズ。長官ハ不明ナリ局長ハ
愚ナリ云々トハ今日常ニ聞ク所ニシテ古來ノ歴史
ニモ多ク見ル所ナリ此不平或ハ事實ニ然ルモノモ
アラント雖亦一概ニ信ズ可ラサルノ情アリ其次
第ハ凡ソ人間社會ニ一事ヲ爲スニモ其事ノ關係ス
ル所ハ千緒萬端ニシテ假令ヒ便利ナリト思フ所ノ

(三五)

モノニテモ之ヲ行フテ利ヲ得サルノミナラズ一利ヲ興シテ却テ二弊ヲ生スルノ例少ナカラズ故ニ事ヲ爲スノ要訣ハ其事ノ利不利ヲ論スルヨリモ其事ノ關係ヲ察スルニ在リ。其關係ノ多寡ヲ察シテ行ハル可キノ路ヲ取ルニ在リ。蓋シ壯年進歩ノ輩ハ其責輕クシテ其關係スル所少ナキガ爲ニ往々事ヲ容易ニ視ルノ弊ナシトセズ之ヲ容易ニ視テ容易ニ行ハレザルヲ見レバ則チ不平ヲ鳴ラス其罪他ニ在ラズ自カラ反顧シテ可ナリ或ハ事實官途ノ全面ニ於テ愚論ノ行ハレテ堪ヘ難キ事モアラン我輩モ亦往々コレアル可シト信ス然リト雖モ全面ノ事ハ自カラ其主管ノ責任ニ在ルコトナレバ傍ヨリ喙ヲ容ル可キニ非ズ此場合ニ於テ自カラ忍フ可ラサルモノト決心シタラバ唯身ヲ退ケテ官ヲ去ルノ一法アルノミ條理ニ違ハサル者ト云フ可シ若シモ然ラスシテ心ニ不平ヲ抱キナガラ身ハ尙官ニ就キ枉ケテ不愉快ナル日月ヲ消シテ公ニ其心事ヲ語ルコトヲモ得

ズ故サラニ其職掌ヲ怠リテ公務ノ遲滯ヲ致シ以テ不平ヲ慰ルノ方便ニ用ルガ如キハ約束ニ背クノミナラズ道德ニ於テ之ヲ許ス可ラズ破廉耻ノ甚シキ者ト云フ可キナリ世人ノ常ニ云フ如ク西洋諸國ノ人ハヨク其職掌ヲ守リ官途ニ於テ長官次官以下ノ諸書記官各其當務ノ權限内ニ居テ毫モ超越スル者ヲ見ズ又政黨ノ新陳交代シテ諸省ノ長官ヲ進退スルルルニモ其進退ハ唯長官ノミニ止マリ省中ノ常置官員ハ素ヨリ政黨ニ關セサルノ約束ニシテ政治兩黨ノ相容レザルハ水火ノ如シト雖モ常置官ハ恬トシテ之ヲ傍觀シ水來レハ水ニ從ヒ火來レバ火ニ從ヒ通常ノ事務ヲ執テ嘗テ變動スルコトナク又其進ミ出タル長官モ唯施政方向ノ大體ヲ指示スルノミニシテ毫モ省中ノ常務ニ干涉スル事ナク以テ政黨交代ノ大舉ヲ滑ニスルガ如キハ職掌ヲ守ルノ氣風美ナリト云フ可シ唯官途ノミ然ルニ非ス諸商會社ノ役員ヨリ尙下テ日常ノ雇人門番小使給仕ノ輩ニ至

ルマテモ其役前ヲ勤ムルノ堅キハ我日本人民ノ及
フ可ラサル所アルガ如シ約束ノ時刻ヲ違ヘズ、約
束ノ場所ヲ違ヘズ服役ノ間、笑語セズ遊戯セズ致
々勉強スル其有様ハ實ニ感賞ス可キモノ多シ其外
面ヲ皮相スレバ上下ノ間全ク壓制束縛ヲ以テ相接
スルガ如クニ見レ_レ之ヲ束縛ト思ハズシテ双方共
ニ不快ノ感覺ナキハ數千百年ノ間ニ養成シタル習
慣ニ由テ致ス所ノモノナラン事務ノ細大輕重ニ論
ナク實際ニ事ノ擧ラン_トヲ慾スルモノハ此氣風習
慣ノ大切ナル_トニ注意セサル可ラザルナリ

其 十

註 「局外窺見」は明治十五年七月十九日より同二十九日に互
リ「時事新報」に掲載された社説であるが、此第四章は紙上
には出なかつた。原稿は文章の途中で切れてゐる。「参考」
局外窺見（正八一—九八）

局外窺見第四章

社會組織ノ由來ヲ尋ル事

我日本國ハ近時ノ西洋諸國ト交ヲ開テ漸ク彼ノ
文明ヲ取り漸ク彼ノ事物ニ倣ヒ文學技藝ニ商賣工
業ニ兵制政治ニ至ルマデモ漸ク彼レニ倣フテ恰モ
我社會ノ組織ヲ一變セントスルモノ、如シ然リト
雖_レ社會ナルモノハ初生兒ニ異ナリ初生兒ガ他ニ
倣フテ漸ク言語ヲ發シ漸ク事物判斷ノ智ヲ生スル
ハ遺傳ヲ除クノ外ハ悉皆無ヨリ有ヲ得ルモノニシ
テ或ハ其教育ノ方法ニ由リ一新人ヲ鑄冶シ出ス_ト
モ亦難カラザル可シト雖_レ社會ハ則チ之ニ異ナリ
幾百千年ノ由來ヲ以テ其組織既ニ成ルモノナレバ
此既成ノ體ヲ以テ他ニ倣ハントス無ヨリ有ヲ求ル
ニ非ズ正ニ中年ノ身ニシテ新ニ一藝ヲ執行セント
スル者ニ異ナラズ、生來ノ教育コレヲ忘レントス
ルモ忘ル可ラズ、否ナ之ヲ忘レズシテ利益ナルモ
ノモ甚ダ多シ、新法固ヨリ取ル可シト雖_レ舊套全
ク脱ス可ラズ其取捨甚タ難シト雖_レ結局我輩ノ持
論ハ我レヲ空フシテ他ノ文明ヲ取り正ニ他ニ等シ

キ一新社會ヲ組織セント欲スル者ニ非ズ故ニ今東西ノ社會ニ就テ其組織ノ由來ヲ論スルヲ緊要ナリト信ス即本章ノ旨トスル所ナリ

西洋史家ノ說ニ據レバ人生社會ヲ成スノ初ニ在テハ居ルニ常住ノ地ナシ幾多ノ群民ガ野生ノ鳥獸ヲ捕ヘテ之ヲ喰ヒ草木ノ實ヲ食ニシ其皮葉ヲ衣ニシテ動靜定リナキ者ガ少シク進テ牛羊其他ノ家獸ヲ牧スルヲ知リ天然ノ水草ヲ逐フテ處ヲ移ス之ヲ牧畜ノ時代ト云フ牧畜ノ時代漸ク止ムニ從ヒ人民漸ク土ニ就テ耕スヲ知ル之ヲ耕作ノ時代ト云フ即チ今ノ開化世界ノ農民ニシテ此耕作ノ時代ニ至ルマデニハ必スシモ牧畜ノ時代ヲ經サルモノナシ之ヲ文明國ノ古史ニ徵シテ知ル可シ又今日ノ野蠻半開ノ民ヲ見テモ其實際ヲ證ス可シトテ世界古今普通ノ事實トシテ嘗テ疑フ者ナシト雖モ我輩ハ獨リ我日本社會ノ由來ヲ視察スレバ此西史ノ言モ亦盡ク信スルニ足ラザルモノアルガ如シ竊ニ我

國史ヲ案スルニ神代ノ事ハ遠クシテ考フ可ラズ神武天皇以來日本ノ國民ガ野生ノ鳥獸草木ヲ衣食シタリトノ事ヲ聞カズ又次デ牧畜ヲ事トシ水草ヲ逐フテ處ヲ移シタル者アルヲ見ズ加之崇神天皇ノ世ニ農ハ天下ノ大本ナリ民ノ特テ以テ生ル所ナリ今河内狹山ノ埴田水少シ其國ノ百姓農事ニ怠ル其レ多ク池溝ヲ開テ云々ト詔セラレタルハ今ヲ去ルヲ二千年ノ古ニ在リ我國ニ農業ノ整頓シタル年久シト云(日本書記)我國ニ農事ノ進歩シテ社會ノ整頓シタルハ年久シト云フ可シ神武天皇以來全ク農ヲ以テ國ヲ立テ人民各永住ノ地ニ安シタルモノナラン又野獸家畜ヲ以テ民ノ常食トシタルヲハ曾テ之ヲ歴史ニ見サルノミナラズ肉食ヲ忌ムノ慣行ハ却テ人ノ口碑ニモ傳ヘテ今日モ尙其餘風ヲ存スル處多シ

左レバ神代ノ事ハ閻キ人王第一世神武天皇ノ御宇ヨリ日本ノ人民ハ居ニ常住ノ地ナキガ如キ蠻人

ニ非サルヤ明ナリ既ニ農ヲ以テ處ヲ定メ自カラ村落ノ體ヲ成ス片ハ其男女相互ニ娶嫁シテ親戚ノ縁ヲ重ネ居家相隣シ耕地相隣シ又骨肉ノ親アリテ世々其村落ヲ去ラズシテ永住ノ居民タリ人情厚カラザラント欲スルモ得ヘカラザルナリ一村ノ内ニシテ斯ノ如シ全國ノ景況如何ヲ察スルニ國中到ル處農ニ適セザルノ地ナクシテ此業ニ就カザル者ナシ且日本ノ國民ハ蝦夷ノ土民ヲ除クノ外往古ヨリ言語ヲ共ニシ文字ヲ用ルニ至レバ其文字ヲ共ニシ宗教ヲ舶來スレバ又其宗教ヲ共ニシ冠婚葬祭ノ事ヨリ衣服飲食ノ些末ニ至ルマデモ一切其習慣ヲ同フセザルモノナシ蓋シ開闢以降一國一政府ノ下ニ居テ政令一途ナリシガ故ニ民情モ亦一致シタルコトナラン若シモ神武天皇以前ニ幾多ノ獨立國ナリシヲ天皇ノ武ヲ以テ合併シタルモノ歟若シクハ天皇ノ後ニ國勢四分五裂シテ幾多ノ獨立小王國ト爲リ數百年ノ間ニ各宗旨ヲ思ニシ教育ヲ異ニシ隨テ文

字ノ制ヲモ各別ニシ言語ニ至ルマデ殆ト相互ニ通セサル程ノモノヲ更ニ合併シタルコトナラバ民情ノ一致ハ甚タ難キコトナラン其難キ者ヲ強ヒテ一致セシメントスレバ止ムヲ得ザルノ場合ヨリシテ殘刻ノ政ヲ施スコト西洋ノ往古羅馬政府ガ異類ノ國土ヲ征伏シテ其人民ヲ壓制束縛シタルガ如キ有様ニ陥ラザルヲ得ズ今其然ラザルモノハ我帝室ノ威徳ヨク全國ヲ統御シテ其力ニ餘裕アリシガ故ナラン今日ニ在テモ日本國民タル者ハ帝室ニ向テ此舊恩ヲ忘却ス可ラザルナリ(世間ノ勤王家ナル者ハ兎角文思ニ乏シクシテ帝室ノ恩徳ヲ口ニ唱ルノミニシテ理論上ニ其恩徳ノ所在ヲ知ラザル故ニ其見ル所常ニ近淺ニシテ却テ人事ヲ誤ルコト多シ畢竟小兒ノ愛ス可クシテ恃ム可ラサル者ニ異ナラズ我輩ハ唯コノ輩ノ心事ヲ憐ムノミニシテ之ト共ニ經世ノ事ヲ語ルヲ好マザルナリ)中古足利ノ世ニ於テハ諸方ノ豪傑一方ニ割據シテ各獨立ノ體ヲ成シタレバ

我國民ハ其以前一帝政府ノ下ニ在ルコト二千餘年既ニ已ニ一致ノ習慣ヲ成シタルモノナレバ諸豪ノ割據ハ兵馬政治ノ割據ニシテ如何ナル武力政權ヲ用ルモ日本國中民情ノ一致ハ之ヲ動カスコト能ハサリシモノナリ

右ノ如ク我國民ハ國初ヨリ其處ヲ定メテ鄉黨ノ交際ニ情ヲ以テシ又コノ鄉黨ト鄉黨ト交リ擴メテ一州ト一州ト交ルニモ情ヲ以テシテ全國相互ニ情ノ通セサルハナシ我日本ノ社會ハ情ヲ以テ組織スルモノト云テ可ナリ蓋シ情ノ働ハ人ノ私徳ノ發表シタルモノニシテ之ヲ古來我國ノ人事ニ徵スルニ大ニ西洋諸國ノ風ニ異ナルモノアリ今其一ニヲ舉レバ

其十一

註 明治十六年の執筆に係るものゝ如し。此草稿も文章の途中で切れてゐる。

西洋ノ古語ニ云ク醫ハ自然ノ臣僕ナリト蓋シ自然良能ハ常ニ病ヲ癒サントスト雖凡庸ノ醫流往々療法ヲ誤リ却テ良能ノ働ヲ妨ル者多キガ故ニ之ヲ警メタルノ語ナラン支那ニテ藥ナケレバ中醫ヲ得ルト云フモ同様ノ意味ナリ然リト雖凡庸ハ唯醫師ヲシテ害ヲ爲サシメザルニ止マルノミ即チ其消極ノ弊ヲ除カントスルモノニシテ醫術積極ノ功ヲ期スルモノト云フ可ラズ抑モ近來物理學ノ次第ニ進歩シテ其一部分タル醫術モ亦共ニ上達スノ日ニ當テハ唯自然ノ良能ヲ妨ケサルヲ以テ醫ノ本分ヲ盡シタリト云フ可ラズ我輩ヲシテ所思ヲ吐露セシメントナラバ今日ノ醫ハ自然ノ臣僕ニ非ズ。醫師能ク自然ヲ臣僕ニシテ始メテ本分ニ愧ルナシト云ハサルヲ得ス言全ク古人ニ反對シテ或ハ世ノ耳目ヲ驚カスコトモアラント雖凡庸事實ニ於テ鄙言ノ妄ナラザルヲ見ル可シ元來自然ノ力ナルモノハ唯約束ノ固キノミニシテ徹頭徹尾仁慈ナルニ非

ズ風雨水火ノ力ハ自然ニシテ之ヲ利用スレバ人間ノ益ヲ爲ス可シト雖凡之ヲ放却シテ其働ク所ニ任スルルハ言フ可ラザルノ災ヲ爲ス人ノ知ル所ナリ而シテ其働カヲ制御シ之ヲ利用スルモノハ何ソヤ唯人力ニ依頼ス可キノミ然ハ則チ自然ノ仁タリ不仁タルハ人間ノ智力如何ニ在テ存スルモノト知ル可シ故ニ今人身ノ病ニ於テモ自然ノ力ハ每常コレヲ癒サントノミスルモノニ非ズ時トシテハ人ヲ殺サントスルコト甚タ多シ例ヘバ内臓ノ焮衝ニ於テ醫術ヲ施サ、ルルハ自然ハ其働ヲ逞フシテ之ヲ斃サントスル者ナレ凡醫師ノ差圖ニ從ヒ患部ニ氷袋ヲ貼シテ充血ヲ防キ又ハ「パップ」ヲ施シテ其部分ノ蒸發ヲ促カスガ如キ之ヲ人力ト云フ即チ自然ハ患部ニ血液ヲ送ルコト常度ニ過ギテ止マルヲ知ラズ又蒸發ヲ妨ゲテ顧ミル所ナク以テ人ヲ殺サントスルモノヲ醫術ニ由テ其猛力ヲ制止スルモノナリ疽ノ腐敗モ自然ニ任スレハ將サニ全身ニ及ボサン

トスルモノヲ醫術ハ之ヲ切斷シテ禍ヲ一部分ニ止メ、金創ノ如キモ自然ハ往々之ヲ腐敗セシメテ禍ヲ大ナラシメントスルト雖凡醫術ハ防腐藥ヲ用キテ其暴動ヲ逞フセシメザル等コノ類ヲ計レバ枚舉ニ違アラズ何レモ皆自然ト醫術トノ戰爭ニシテ其勝敗ヲ見テ醫術ノ良否ト醫師ノ巧拙ヲトス可シ右ハ我輩ノ持論ニシテ其詳細ヲ説カントスルニハ僅ニ數百言ヲ以テ盡ス可キニ非サレバ姑ク之ヲ他日ニ譲リ爰ニ醫術進歩ノ道ヲ案スルニ十中ノ八九器械的ニ依ラザルモノナシト信ス即チ耳目手端ノ働ヲ以テ病ヲ診査スルコトナリ數十年來醫師社會ニ行ハル、打候聽候ノ法ハ其一端ニシテ器械ヲ以テ膀胱内ノ淋石ヲ碎テ之ヲ取り或ハ直腸ヨリ手ヲ入レテ内臓ノ景況ヲ探リ、或ハ「シリンジ」ヲ以テ胃中ノ汚液ヲ取り或ハ子宮及ビ胃ノ裏面ヲ鏡ニ寫ス等察病ノ道ヲ器械的ニ取ルモノ甚ダ少ナカラズ蓋シ病ヲ診査スルノ法ハ此道ニ由ルモノヨリ確

實ナルハナシ殊ニ今後視學ノ器械次第ニ巧ヲ増スニ從テ漸ク内部ヲ窺フノ區域ヲ増シ子宮直腸又ハ膀胱胃ノ裏面ノ如キハ恰モ口中ヲ見ルト一般ニシテ尙精巧ノ極度ヲ云ヘバ凡ソ針大ノ器械ヲ入ル可キ處ニシテ其實況ヲ寫シ見ル可ラザルモノナキニ至ル可シ或人云ク醫術ハ外科ヨリ進歩スト此言眞ニ然リ無形ノ病理論ノミニ依頼シテ往々中ルモノモナキニ非ザレモ動モスレバ意外ノ變ニ逢ツテ其理論ノ顛覆スルヲアリ現ニ今日我國ニ於テ不學無主義ノ古風醫流ガ唯病床ノ經驗ヲ以テ漫ニ治療ヲ施シ時トシテ病ヲ癒スヲアルニ反シテ西洋流ノ學醫ガ時トシテ治療ヲ誤リ之ガ爲ニ愚俗ノ感ヲ來タスヲアルモ内部ノ深遠ニシテ測ル可ラザルノ實證トシテ見ル可シ即チ學醫ハ病ヲ見ルノ眼アリ又コレヲ聽クノ耳アリト雖モ視聽ノ達セザル所ハ之ヲ如何トモ可ラズシテ本來學問上ノ眼モナク又耳モナキ古流醫輩ニ比シテ巧拙ナキノ奇觀ヲ呈スルモ

ノナリ

醫術ノ進歩ヲ器械的即チ外科ノ道ニ取ラントスルニハ其法一ニシテ足ラズ今日醫學士ノ專ラ勉強スル所ナリト雖モ其諸法ノ中ニ最モ緊要ニシテ諸ノ基礎タル可キモノハ死體解剖是レナリ病者無病者ノ屍ヲ解テ人體ノ造工組織ヲ知り之ヲ生理ニ照ラシテ生活機能ノ變態常態ヲ詳ニシ原病始テ言フ可ク治病始テ説ク可シ殊ニ患者ニ接シテ彼ノ器械的ノ診査ヲ用キントスルモ常ニ死者ノ内部ヲ開テ其實況ヲ明ニスルニ非サレバ生者ノ内部ヲ窺フモ無益タル可キノミ解剖科ノ大切ナル勝テ言フ可ラサルナリ我邦ニ於テモ西洋醫學ノ先人ガ始メテ解剖ノ事ニ志ヲ起シテ其事ニ着手シ其原書ヲ翻譯シタルハ今ヲ去ルヲ一百十年(安永三年杉田玄白先生ノ解體新書ハ日本國譯書刊行ノ權輿ニシテ今明治十六年ニ至ルマデ一百十年ナリ)爾後洋學醫社會ニテハ曾テ怠ルナシト雖モ常ニ時勢ニ適セズ殊

ニ不學ノ漢醫者流ニ嫌忌セラレテ盛大ニ至ラザリ
シモノガ維新ノ一舉百般ノ世事ト共ニ解剖ノ事モ
亦起リ刑場ノ死體ハ無論尙其外ニ囚獄徵役場又ハ
貧民養育院等ニ於テ病死シタル者ハ屍ヲ舉ケテ醫
學部ニ附シ其演習ノ資ニ供シテ學者實際ノ益ヲ爲
ス。洪大ナルハ人民ノ幸福。邦國ノ榮譽ニシテ益
我醫學ノ進歩ヲ見ル。ナラント我輩ノ切望シタル
所ナルニ去年春ノ頃ヨリ醫學部へ送附ノ死體大ニ
減少シテ該部ノ學士モ動モ手ヲ空フシテ無事ヲ苦
シムノ情アリト云フ蓋シ近日ハ彼ノ囚獄徵役場又
ハ

清岡氏より圖書館へ寄贈の資料の中、未發表の
原稿は以上の通りで、外に一點時事新報社宛書翰
があるが紙數の都合で割愛する。

〔附記〕

小泉信吉氏洋行に關する資料

塾長小泉信三氏の父君信吉氏は明治七年から十一年まで英京倫敦に留學したが、紀州家より其洋行費の補助があり、これを受くるに至つたに就ては其間に福澤先生が大に盡力奔走せられた事實がある。左記三通の書翰はこれに關するもので、他に此事に關する金子の受領證等の書類が二三點ある。

三浦久太郎氏宛 (明治七年? 九月二十一日付)

一昨年四月飛脚船中にて拜顔其後御尋も不申上時下秋冷相催益御清安被成御座奉拜賀近來世の中は益多事學者も高枕安眠の時にあらず讀書文は自國にて出來候事なれども實際の事情を察するは西洋に行くにあらざれば能はず讀書既に出來候者は是非共一度外國行いたし度唯難題は貧なり迎も大勢と申は難叶候得共せめて壹兩人にてもと存じ先日より色々目論見御舊同藩の小泉信吉君も兼て其志あり即ち其事に當るべき人なり外に壹名同伴にて無理にも此度外行と決意私も聊の金を費す積に御座候就て御相談申上度義は此度信吉君外行の志を遂げ歸國の上は固より有用の人物たるべき事論を俟たず其實は金を費して智恵を買ふの策なりこの買智の一條に付舊知事様に思召は有御座間敷哉唯今の時に當り多少の金を御附與被成候は、必ず後日の御相談相手にも可相成人の志

を助け成すの美事たるは姑く聞き今の所損と後の所得とを計るも尙便利たるべきやと私は一筋に存候若し可然被思召候はゞ御周旋被下度御面倒は奉察候得共御同前に私の爲にあらずいらざる世話を爲して自から慰るのみ右内々の御相談申上度如此御座候頓首

九月廿一日

福澤諭吉

三浦久太郎様侍史

三浦安氏宛

(明治九年?七月二十日付)

酷暑の節益御清安被成御座奉拜賀爾來多事に取紛御無沙汰仕恐縮の至奉存候陳ば小泉氏學資の義昨年一寸御話申上候通り出立の節千圓御遣し相成候得共其砌も餘金は私より取替昨年冬少々爲替にて廻金其金も當九月十月の際までには盡し候筈に付何れにも當月中か來月初には爲替取組候積に御座候就ては去年拜趨の節同氏の執行金を七千と積り内千圓を引殘六千一時に私え御渡し可相成様御話に御座候得共右は如何様にも御都合次第此まで私より同氏の爲に取替候高は一昨年^{但し御遣しの千圓は差引外に}出立の節千五百圓餘其後三百圓餘都合千八百圓餘に相成尙又此度千圓斗り爲替取組度用意いたし居候右の次第其御屋敷の御都合は如何可有御座哉大金の事に付大丈夫に覺悟いたし置度御用多の御中清襟を煩し恐入候得共一封の御報奉願候頓首

七月廿日

福澤諭吉

三浦安氏宛

(明治十年二月三日付)

寒氣尙甚しく益御清安被成御座奉拜賀陳ば小泉信吉學資の義昨年八月三千圓御遣し相成從前の差引勘定いたし候處同人へ可遣高即ち合しの内昨八月より私手許へ百六七十圓預りに相成候姿なり昨年八月爲替相廻し當年夏は又候相廻し候義就ては前以て相伺度同人の學費は滿迄凡七千圓の積り今後其御屋敷の御都合如何可有之哉祿券の沙汰にて華族衆も會計に注意するの時節萬々一も此後三千圓の御出方に御さし支の筋も御座候ては遊學先にて進退困窮可仕間唯今より覺悟いたし不體裁無之様仕度即ち外に策策も無御座唯今歸途の旅費を遣し呼歸すのみ或は會計に御都合も無之三千圓丈けは御遣し相成候義に御座候はゞ當年何月一時に御渡し相成候哉又は何時何程と期限と金高とを定め御遣し可相成哉御内情相伺度何分にも大金の義手管間違候ては容易に取斗出來不申關心不少に付此段御様子奉伺候早々頓首

二月三日

福澤諭吉

三浦先生侍史

尙以本文の義は有のまゝの存意を申上候迄なり紀州様を要して小泉の學資を食るにあらず出來候事なれば相願度候得共時勢の變化意外の事情もあるは珍らしからず萬々一御さし支御座候はゞ唯今斷じて呼返し可申中途の廢業未熟の實を採るに異ならずと雖ども無致方次第に御座候以上